

佐渡米通信

こめへる

2023年 8月号

発行日:2023年8月

編集人:佐渡農業協同組合 総務部総務課 駒形(葵)
jasadosoumu02@snow.ocn.ne.jp

葉緑素計(SPAD)を活用した取り組み体制強化

JA佐渡では、発育状況の把握や追肥量の管理に役立つ葉緑素計(SPAD)の貸し出しを今年度から開始しました。生産者さんに活用して頂けるように研修会内で活用方法の紹介を行っています。ここ数年1等米比率を引き下げた要因となっている高温登熟下においても、SPAD値に基づいた穂肥診断が有効な方法だと言われています。

JA佐渡は多くの生産者の方々にSPAD計を活用して頂き、外観品質の向上と適正な玄米タンパク質含有率の目標達成の両立を目指します。



使い方の動画作成しました!



無償で貸し出しているSPAD計



SPAD測定体験会で使い方を説明している様子

佐渡の米農家さんにインタビュー

金井地区の土屋智徳さんにインタビューをさせて頂きました。土屋さんはコシヒカリ、こしいぶき、新潟次郎を約12ha作っています。学業のために島外に出たそうですが就職を機に家業の農業を継いだそうです。土屋さんにとって職業として農業を選べたことが恵まれていたと感慨を抱いている様子でした。

農家の仕事の醍醐味は、積み上げてきた生産工程が収穫という結果となって返ってくるところだそうです。農業に限ったことではありませんが、作業の中での腰の痛みや自然相手の生育管理の大変さに心が折れそうになることもあります。それでも、高い品質に仕上げることが目標に全ての工程を楽しみながら、省力化出来るところは積極的に工夫することを意識して日々の農作業に努めているそうです。

土屋さんの田んぼに訪れると、雨あがりの空にトンボがたくさん飛んでいました。足元をみると畦にはカエルや孵ったばかりの小さなカマキリなど様々な生きものがいました。土屋さんからJA佐渡がネオニコチノイド系薬剤を排除した取り組みを始めてから、トンボや生きものが増えていることを実感していると教えて下さいました。この景色はJA佐渡管内で見慣れたものとなっていますが、土屋さんをはじめ一人一人の農家の方々の地道な取り組みの積み重ねの上に成り立っていることがインタビューを通して感じられました。



金井地区

田んぼ周辺は、歩くとびにトンボが一斉に飛び交うのもトキがあるのも日常だよ、とほほ笑む土屋さん



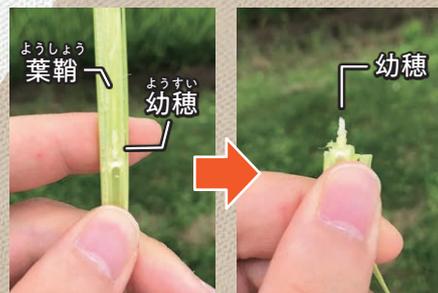
土屋さんの田んぼにいたカマキリの赤ちゃんとトンボ

ほごえ 品質・収量確保に向けた穂肥作業

穂肥の良否でおいしさや品質収量が決まります。適期・適量の施用で高品質の佐渡米を目指します。



暑い日差しの中、穂肥を行う様子



発育過程を調査するために葉鞘をむいて幼穂の形を確認している様子

